

## 学連稽古会感想

その日、東京武道館に一步入ると、受付で記帳を済ませているあいだにも、竹刀を打ち合う音、裂ぱくの気合とともに、床を踏み込む響き・・・それらは、高齢のため近頃めっきり遠くなった私の耳にも、力強く快適に飛び込んできて、一瞬にして心が引き締まり、内なる感動を呼び起こされたような感覚でした。

顧みれば、もう2年近く前にもなる青山学院大での月例稽古会（2020年2月22日）以来の稽古再開。コロナ禍で稽古も試合大会も遠征も、いっさいが中断されていたのですから、実に久々の集まりとなったわけです。

勝手ながら高齢を理由に私は、後半「自由稽古の部」にだけ参加させてもらいました。着装を終え道場に下りていくと、そこは2年近い空白を取り戻そうとするかのように、熱気と高揚感に、剣道独特の臭いを伴った空気が充満していました。

そして後半の45分間、私もなんとか、10人程の方々と剣を交えることができました。コロナ禍の困難な環境のなか、皆さんどこで、どのように研磨を積まれてきたのか、軽やかな動きに鋭い剣先。かなり腕を上げられた方もいて、私自身は反省の念を強めるばかりでした。

稽古終了の太鼓が鳴って面をはずせば、懐かしい顔々々。見慣れた白髪混じりも散見され、道場のあちこちで、たちまち交剣知愛の渦が・・・

でも、いつものような底抜けに明るい飲み会はなく、おしゃべりも控え目に。コロナ禍の厳しい現実に戻され、ちょっぴり寂しい幕切れではありましたが。

それにしても、この1、2年、私はつくづく思い知らされました。コロナウィルスというやつは、酒を酌み交わし、楽しく食べ、語らい、笑い合い、歌う——といった人間の本性を、非情にも全否定してしまう、ということ。80才代半ばになる私は「ああ、もうこれで、稽古らしい稽古ができないまま剣道人生を終える羽目になるのか」と、落ち込む心境になったものです。日課の軸足が欠けてしまったような気がしました。

でも、これではいかん、と失恋から立ち直る若い男のような気持ちで、基本の素振りと独り稽古を本格的に始めたのが、コロナ蔓延から3か月程した一昨年（2020年）6月。幸い自宅のすぐそばに住民のための小さな運動場があり、ケヤキなどの樹木も多く、剣の修行には格好の場です。ひと気の少ない早朝、マスクも不要でみっちり1時間近く、週2回のペース。道衣・袴に着替え、さらには腰がすわるように垂れも締めて。1年に100日を超え、それなりの達成感を味わっています。コロナの感染状況しだいで稽古会の休止・

再開が繰り返されるなか、対人稽古での体力と身体動作の維持に少しは役立ってきたようです。

「(剣道の)基礎を頭の中にしまい込んだままの人が非常に多い」という持田盛二先生のあの味わい深い遺訓を、改めて思い起こし、自分の剣道を見つめ直す貴重なきっかけにもなりました。

いままたオミクロン株の“暗雲”が広がり始めています。そうした予断を許さない状況の中でも、今回の「学連稽古会」の大いなる喜びを未来への希望につなげて、生涯剣道に励んでいこうと、気持ちを新たにしています。

「只今の一念を空しく過ごさず」を座右の銘にして。

全国OB 草野 淳

2021年12月20日